

月刊

語学のススム新聞

4月号

Hello!! from Bangkok!! ~ Chiko's column ~



みなさんこんにちは！4月ですね！平成も終わり、新たな時代の幕開けですね。日本の桜を心に思い浮かべながら、どんどん蒸し暑くなるバンコクで過ごしている Chiko です。さて、私はつい最近、バンコクから日帰りでも行ける、島へ行ってきました。バンコクからバスで3時間、そして船に乗り換えて40分のサメット島という島です。たまたま金曜日に休みが取れたので、えいと島に行ってみました。あまり期待はしていませんでしたが、もう本当に最高に楽しかったので、今月号で少しご紹介したいと思います！サメ

中で、海の中で過ごすことで、本当に癒されました。朝起きて、すぐ海に入ってひと泳ぎして、ビーチでコーヒーをのんで、目を覚まし、ゆっくり本を読むというなんとも贅沢な時間を過ごしました。そして島のご飯！これも今回の旅には欠かせない要素となりました。やはり、島なだけあって、本当にシーフードが新鮮でとっても美味しかったです。特にイカとスズキのライム風味のお料理が、もうビールと最高に合い、二日連続で食べてしまいました。笑。若い時は、海でスポーツをしていたので、大学四年間は毎日朝ビーチに行きトレーニングしていましたが、あまりビーチでのんびり過ごしたことはありませんでした。今回、歳のせいかな(笑)ビーチでのんびりすることがこんなに癒され、楽しいのかと気づきました！そして、何より海の中で自然に癒され、自然の素晴らしさを改めて

ット島は観光地ですが、パタヤなどバンコク周辺のビーチリゾートに比べると、まだまだ自然もたくさん残っていて、何より本当に海がきれいです！パタヤには行ったことがあったのですが、あまりビーチを楽しめなかったのが、今回はビーチでのんびり本を読んだり、ビールを飲んだりしたいなあと考えていました！島にはいくつかビーチがあり、プライベートビーチのような場所もあります。今回は、突然思い立った旅で、金～日の2泊3日でしたので、宿は簡単にゲストハウスのようなところを予約しました。ゲストハウスといっても一階はバーになっていて、部屋の中に清潔なシャワーやトイレもしっかりあり、期待以上の宿でした。そして何より値段が安い！なんと一泊1500円ぐらいでした。宿泊施設からビーチまで徒歩3分で行くことができました。一番近いビーチはメインビーチで観光客もまあまあ多かったのが、ついた日は、夕方までメインビーチでビールを飲みながら過ごし、二日目はバイクを借りて、島中のビーチを巡り、その中で一番気に入ったビーチでのんびりしました。お気に入りのビーチは、遠浅で少し沖に行くと岩がゴツゴツあったので、小さい魚がたくさんいて、シュノーケリングもできました。100均で買った(バンコクにはダイソーがあります！！)ゴーグルを持って行って本当に良かったです。笑。特に島で何をやったというわけではないのですが、自然の

感じたと思います。なんだか、とても忙しく、毎日どんどん時が経ってしまうのですが、たまには、えいと休みを取って日常から離れ、自然の中で過ごすのもいいなと思いました。バンコクに帰り、月曜日からまた通常通りの仕事でした。もちろん休みが終わった残念な気持ちは少しありましたが、なんだか気持ちはスッキリしていて、忙しいけれど、仕事はかどりました。やっぱりエネルギーの充電は必要ですね！水着焼けをこの歳になってバッチリしてしまい、学生にも、「先生焼けましたね！」なんて、言われ、遊びに行ったことがバレバレでしたが(泣)、いいエネルギーの中で授業ができ、とっても充実しました！みなさんも、あんなか最近疲れちゃっ

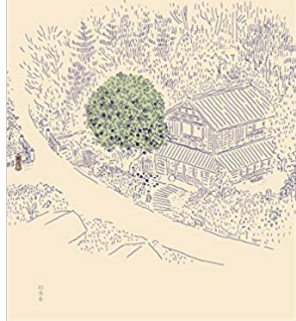
たなあと思つたら少し日常から離れ、自然の中で体の芯からのエネルギー補充を行ってみるのもいいかもしれません！そんなこんなで、また授業準備に追われている日常に戻っている Chiko です。そして、最後の最後にまた嬉しい出来事が！つい二日前から、イギリス時代に一緒に住んでいた、親友のクララ(過去の記事に登場しています！)がバンコクに遊びに来ました！なんだかんだ彼女は、日本にも来たり、私が行くところに行くところに来てくれます。笑！さて、今週はクララがいるのでさらに楽しくなりそうです！！では、みなさん、今月も元気に行きましょう！また、次回！！ Chiko



元気が出る!! 今月のおすすめの一冊

ツバキ文具店

小川糸



みなさんこんにちは。少しずつ暖かくなってくると、なぜだか僕は、何かを始めたい…とか、普段しないことをやってみようかな…という気持ちになってきます。僕はというと、普段は本をAmazonで買うのですが、先日滅多に行かない街の本屋さんに行ってきました。本屋さんに行くと、流行りの本はすぐわかるし、思いがけない出会いもあったりして楽しいですよ♪今回僕が出会ったのは、小川糸さんの『ツバキ文具店』(幻冬舎文庫)です。本の紹介のPOPに「鎌倉の物語的」なことが書かれていたので、つい手にとって読んで見たくなってしまったんですね。

僕は中学・高校と鎌倉・建長寺の隣の学校、鎌倉学園というところに通っていたのですが、学生の

当時は、「寺とかいっぱいありすぎて辛気臭い」「汚い木の塀とか何とかならないの?」「この砂利道歩きにくいから、舗装しちゃえば」なんて、不届きなことを思っていました(笑) 恥ずかしながら、学校で何を習ったのかは全く覚えてないんですね。覚えているのは、「教室からよくリスが見えたよなあ」とか、「体育の授業で、ださいエンジのジャージを着て半僧坊をランニングしたよなあ」とか、「授業を抜け出して、由比ヶ浜までチャリで遊びに行ったけ」とか、「あいつは嫌いだったけど、こいつはイイ奴だったなあ」とか、そんな喜怒哀楽の絡んだ事ばかりです。当時は10代ですから鎌倉の侘び寂びなんてわかりませんよ。古い・汚い・カビ臭い…そんな気持ちでした。けれど今思い返すと、伝統を受け継ぎ少しずつ改善し

ながら次の世代につないでいたんだ。そこに住む人たちは、周り近所との繋がりを大切にして、日々の生活を送っていたんだ、と思うようになりました。この『ツバキ文具店』はそんな鎌倉の奥ゆかしさや、昔からの伝統や習慣を大切にする生活が、人を縛るのではなく安定や安らぎを与えてくれるのではないかと、そんな発見ができる小説です。

主人公の雨宮鳩子は、江戸時代から続く代書屋を生業とした祖母に厳しく育てられたあまり、それが嫌で海外へ逃避してしまっています。6年間の海外生活の中で一度も日本に帰国する事なく、帰ってきた今は、祖母が亡くなった後のことでした。帰国した鳩子は、自分のできることを考えますが、考えても考えてもできることといえば、子どもの頃から祖母にしつけられたことばかり。厳しい書道の鍛錬による技のみが鳩子の支えでした。鳩子は半ば仕方なく代書屋を継ぐことにして、生活をしていきます。しかし代書屋というのは、依頼者の身になってそのメッセージを形にすること。試行錯誤しながら、依頼者から受けた仕事を心を込めてして行くうちに、その仕事の素晴らしさに気がついていきます。もちろん、困った時、落ち込んだ時、先の見えない時も沢山やってくるのですが、その度にご近所さんの何気ない言葉や気遣い、さりげない思いやりに助けられます。そして祖母から受けた辛かった過去の思い出が、愛情の裏返し表現だったことに気がついていく。日々の暮らしの積重ねの中にこそ、浄化と再生があるのかもしれない。まとめ小林義和



4月といえば新しい仲間達との出会いの季節。生徒さんの中には同僚が外国人の方も少なからずいらっしゃると思いますが、外国人とのコミュニケーションでは時に違和感を感じることがあるのではないのでしょうか？ このことは英会話のレッスンの中でも時々見られることですが、そんな困った時に役立つようなことが書いてある本がありましたので、少しだけご案内いたします。『日本人が誤解される100の言動』山久瀬洋二著、ジェイク・ロナルドソン訳(IBC出版)です。以下Pg. 96-99からの抜粋です。

日本人：Yesと言ったら、どんどん話が進んでいった。
外国人：日本人は後になって既に話したことを問いかけてくる。

遠慮とは、自分のニーズをあえて表明せず、控えめに相手に対応することを意味します。英語で言う「hesitate」と似ていますが、日本の場合、遠慮することは社会で人とうまくコミュニケーションしていくための一般常識で、「謙遜」や「謙虚」の概念と共通したものがああります。例えば、日本人は人の話の途中で割り込む事を、人の話の腰を折ると言って嫌い、話の途中で意見を差し挟むことや、解らないことをチェックしたりする行為をあまりしません。遠慮の意識が働いているのです。悲惨なのは、外国から来た人が日本人の前で、英語で会話を進めていく場合です。日本人は話の腰を折っては悪いと思ひ、わからないことがあっても確認できないまま、相手の言うことに相槌を打ち続けます。一方、英語社会では、解らないことがあれば、相手の話を遮ってそれを確認すべきだという無言の了解があります。したがって、もし日本人が相手の英語を遮らずに相槌を打ち続けていると、その日本人は彼らの言っていることを理解していると思うのです。会話の後になって、日本人が自分の言っていることを理解していないとわかった時、相手はなぜそれなら話している時に質問してくれなかったのかと怪訝に思い、それがビジネスであれば、日本人のパートナーの能力に疑問を持つこともあり得ます。相手が英語で話している時、いかにそれを遮り、確認したり質問したりするか。それには相手の前に手を上げて、ちょっと待ってくださいなどと言って相手の話を遮るノウハウが必要なのです。

JAPANESE : When I said “Yes”, the conversation went much better.
FOREIGNER : Japanese people ask questions about things that have already been said. It’s really annoying.

Enryo means to not express your needs, dealing with the other person in a reserved way. It is similar to the English word ‘hesitate’, but in Japan, it is a very common way of having good social communication with people. It also has many things in common with the concepts of *kenson* and *kenkyo*. For example, Japanese people regard interrupting someone as **spoiling the person’s story**, and dislike it. They also don’t do things like **interjecting** their opinions or checking points they don’t understand while someone is talking. Their idea of *enryo* never stops working. The worst things is when people from abroad have conversations in English in front of Japanese people. Japanese people think it’s wrong to interrupt the flow of the story, so even if there is something they don’t understand, they continue **echoing** the person’s speech to show they are listening, without asking questions. On the other hand, in English-speaking societies, if there is something you don’t understand, there is a **tacit understanding** that you should interrupt the other person to confirm things. It follows that if a Japanese person echoes the other person’s English without interrupting, he or she will think the Japanese person understands what is being said. After the conversation, if the person finds out that the Japanese person did not understand, he or she will be puzzled about why the Japanese person didn’t ask a question while they are talking. If it is a business situation, the person may doubt the Japanese partner’s ability. When the other person is speaking English, how can you interrupt



him or her to ask questions? You need know how to raise your hand and say, “Just a moment.”
いかがですか？何か心当たりがあるようでしたら、この機会にコミュニケーションスタイルを少し修正して見てもいいかもしれませんね。

さて次は、読めば必ずワクワク・ドキドキしてきて、ますます世の中がキラキラ光って見えてくる小説のご案内です。森沢明夫著、『きらきら眼鏡』(双葉文庫)です。愛猫を亡くして打ちひしがれていた立花明海(男だけど、あけみ)は古本屋で一冊の本を買った。中には「大滝あかね」と書かれた名刺が挟まっていた、自分が心を打たれたフレーズに傍線が引かれていた。気になった明海は思い切っであかねにメールをすると、会うことになった。あかねは年上の明るい女性で、日常の物事を幸福に捉える「幸せの天才」だった。だが、あかねには病に伏し、余命宣告を受けている恋人がいた。次第にあかねに惹かれていく明海は本当の自分の気持ちを隠しながらも、あかねの恋人に面会を果たす。ざっとこのようなストーリーです。10ページに1箇所は、感動ポイントがあるので、もう是非読んでみてください♪そこで今回は、永久保存文でしょ!!!と感じたあかねのセリフを以下ご紹介いたします。

昔はわりと人見知りだったし、小さな感動なんて見過ごしてきたと思う。自分の心には、よく嘘をついていたし…。(それで)きらきら眼鏡、かけることにしたの。私の視界に入ったものすべてを、きらきら輝いたものにしてくれる眼鏡。それを常にかけたつもりで生きようって決めたの。だから、店員さんはきらきらした素敵なお人だし、釣り上げられた鯉はきらきらしたキュートな魚だったし、この料理とお酒もきらきらして見えるほど美味いって感じるの。最初の頃はかけ忘れちゃったりしてたんだけど、慣れてくると、結構ちゃんとかけていられるようになるみたい。あれこれ考える前に、とにかく一歩を踏み出してみようかなっていう気分になれるし、恋愛にたいしても、人生にたいしても、できるだけ自然なままの自分でいようって思えるようになったかも。わたしね、気になる人には会ってみて、読みたい本は読んで、やりたい仕事はやろうと思うの。で、その結果、得られた感情は、ひとつひとつ丁寧に味わおうって思ってるんだよね。いかがですか？小説の中の人ですが…、素敵なお女性ですよええ。ちなみにこの作品は映画化もされていて、ヒロインの大滝あかね役は池脇千鶴さんです。DVD化されるのが待ち遠しいです♪ まとめ小林義和

Rie's column



皆さんこんにちは、スタッフのRieです。さて、先日知ったニュースなのですが、この4月から外国の日本語表記が変わります。これは歴史の中で初めての事ではないのですが、実は、『ヴ』が消えるのです。つまりは、カリブ海にある「セントクリストファー・ネー『ヴ』イス」という国の表記は「セントクリストファー・ネービス」に、そしてアフリカにある「カーボ『ヴ』エルデ」が「カーボベルデ」に変わるというのです。その2カ国が実は、正式な日本語表記で『ヴ』を使っていた最後の国だそうなのですが、世界の国名から『ヴ』が無くなるの事なのです。「なぜ無くなるのか？」という問いを持たれると思いますが、外務省の答えは「ヴを使わない表記の方が今の国民になじみがある」という事だそうです。でも実は平成15年の法改正でかなりの変更があったようです。多くの国名で「ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ」は「バビブベボ」に改められ、「ティ」や「チュ」も「チ」や「チュ」に変わったそうです。確かに海外にある日本の大使館や総領事館は「在〇〇日本国大使館」のようにその国の名前が入る事になっていますし、法的な文書などに記載される国名等は統一していないと困る事がありそうですね。でも私としましては、また一段とカタカナ英語に近づくようで、複雑な気持ちです。『ヴ』という表示のおかげで、あ、これは『V』だからちょっと下唇を噛んで発音しないと！なんて、『B』とすぐ切り分けられましたが、これからは知らない国名や単語がカタカナ表示だと迷ってしまいますね。『ヴ』という表記は明治時代の教育者、福沢諭吉が広めたいのなのですが、一度は戦争によりリセットされた外来語は、戦後長い年月をかけ、表示をどうするか？という事が問われ、改められて来たようです。「ヴ」が無くなるなんてちょっと寂しい気がしますね。皆さんはどう思いますか？
(NHK NEWS WEB 参考) Rie